亀山郁夫著『破滅のマヤコフスキー』

筑摩書房

いきなり個人的な思い出話からはじめる。私はかつて亀山郁夫を東京外語大学に迎えるときの審査員のひとりだったが、提出された業績のひとつ『甦えるフレーブニコフ』を手にして文字通り圧倒された。恥ずかしながらフレーブニコフというロシア詩人の存在さえ知らなかったため、その大著にほとんど啓示と言っていいほどの衝撃を受けたのだ。この未知の東方詩人の途方もないスケール、新鮮かつ深遠な詩的言語の底知れぬ魅力と同時に、およそテクストの確定作業さえも難行となるくらい困難を極める当時のソ連本国における劣悪、いやほとんど絶望的ともいえる研究条件を克服して、世界初の本格的なフレーブニコフ論・評伝を書き上げた四〇歳のロシア文学者のただならぬ情熱と力量に。だから、私は通常の「審査」に伴う緊張や苦痛をまったく経験せず、このような希有の傑作の作者を同僚に迎えることのできる喜びに、ひたすら陶然となっていただけであった。これは、大学人としてもそう多くある経験ではないし、またいたって視野の狭い仏文学者すぎない私だけの経験でもない。のちに、私などよりはるかに射程の広い知的視力をもつ友人のフランス文学者＝哲学者、西谷修の口からも、「あの本を読んで打ちのめされ、自分はこれまでなにをしてきたのだろうと思った」というじつに率直な言葉を聞いたことがある。『甦えるフレーブニコフ』はきっと、近年の西谷のめざましい活躍の刺激剤、発奮材料の役割をも果たした著作だったと言っても、あながち過言でないにちがいない。

ともあれ、こうして私たちの同僚のひとりとなった亀山郁夫は、ソ連崩壊後の九〇年代にはいってほとんど無尽蔵ともいえる文学的熱情、知的エネルギーを惜しげもなく燃焼させつつ、続々と著書や訳書を公刊してきたのは周知の事実だが、なかでもこの『破滅のマヤコフスキー』はおそらく『甦えるフレーブニコフ』につぐ著者の会心作だろう。俗に「巻を措くこと能わず」という評語があるが、まさに本書こそそれにふさわしいものであり、私はある晩に読み出したらもうやめられなくなり、寝るのも惜しく、翌日目が覚めるとすぐにまた読んで、ついに二日足らずでこの八五〇枚、ゆうに三百頁を越える大著を読了したのだった。

『破滅のマヤコフスキー』は一九二七年、ということは一八九三年生まれのこの「ソ連の桂冠詩人」三四歳のときから、一九三〇年の自殺のときまでのほぼ三年間を「批評の言葉」ではなく、「事実のもつ厚み、事実のもつ力によって、死の入江に少しずつ歩みよる詩人の内面をできるだけ鮮明に映し出」そうという試みであり、この試みはマヤコフスキー他殺説という驚くべき主張までもふくむ、ソ連崩壊後のロシア本国を中心として次々に発掘され、発表された厖大な新資料を冷静かつ縦横に駆使する著者の並々ならぬ力量のおかげで充分に成功していると思われる。治安当局とも通じながら、詩人と宿命的な三角関係を形成する奇怪なブリーク夫妻、なにかに憑かれたように次々と繰り返された恋愛の相手となった女性たち、ヤーコブソン、メイエルホリド、パス

テルナークら友人との、息詰まるような緊迫した関係・交流が生き生きと描かれるだけでなく、それと同時に本格的にスターリン独裁制に向かおうとする当時の政治・社会体制の激変やそのなかで翻弄される文学者・芸術家たちの対立と抗争、それを蔭で操る治安当局者たちの暗躍などが効果的に紹介・考察され、そして有無を言わさぬ形で時代に追いつめられて行くマヤコフスキーという天才的抒情詩人の、超人的でも絶望的でもあるような活動と著述の足跡が克明に記述される。しかも著者も言うように、「時代と自らの存在の危険性に対する驚くべき洞察力の深さ」の持ち主であるマヤコフスキーであればなおのこと、破滅に向かうこの詩人の運命がまた、ソビエト全体主義そのものの孕む危険性、そしてもうすでに、その遠からぬ破滅の可能性をも暗示するという構図も、おのずから鮮やかに浮かび上がってくる。だから本書が、なまなかの推理小説をはるかに凌ぐスリルとサスペンスに富んでいるとしても、なんら不思議ではないのだ。

いまやどこでも、革命によって新しい人間、新しい世界を創造するというソビエト・ロシアの壮大な実験は、終わりつつある二十世紀の忌まわしい恐怖の経験、野蛮で空しい狂気の体験としてしか振り返られなくなっているように見受けられる。このような状況のなかで、数千万単位もの犠牲者を出したそのソビエト的全体主義と一体になり、その化身たらんとして破滅したマヤコフスキーの伝記を書くのに六年もの長い年月を費やすということ自体、あまりにもドンキホーテ的な時代錯誤、グロテスクな所業ではないのか。そんなありうべき常識的な懐疑にたいして、著者はあえて「全体的なるものの達成という執念にとりつかれた人間の、私的なものとの恐ろしいまでの断絶」こそマヤコフスキーが「現代的」であるゆえんなのだと言ってはばからない。逆に言えば著者は、「全体的なるものの達成」はいつでも、と言って悪ければ、いつかはかならず、人間の「執念」になるはずであり、人間とはそんな狂気をも秘めている存在に他ならないと考えているらしい。それが本書の、ほとんど賭にも似た挑戦だと言っていいだろう。

残念ながら私は、そうした無謀とも言える挑戦に心から賛同するだけの若さをとっくに喪失した年齢に達しているが、それでも本書を一気呵成に読み終えたところを見れば、かならずしもその挑戦に過度の違和感を覚えはしなかったらしい。正直なところ、マヤコフスキー的なナルシシズムや手放しの抒情性などはあまり好みではないにもかかわらず、である。そこで最後に、著者のドンキホーテ的、もしくは一見グロテスクな挑戦が決して孤立無援のものではないのかもしれないという傍証として、第二次大戦後共産化されたチェコでの青春時代の一時期にマヤコフスキー的な革命的抒情詩を実践し、そのグロテスクさ加減を心底嫌悪することから詩を捨て、小説家に転じたミラン・クンデラの近年の一文を引いておこう。

「マヤコフスキーの迷盲は、永遠に変わらぬ人間の条件の一部である。マヤコフスキーの途上に霧を見ないこと、それは人間のなんたるかを忘れることであり、私たち自身のなんたるかを忘れることなのだ」（『裏切られた遺言』）

（西永良成）